

生まれ持った体のままで

～女性のオリンピック参加と参加可能競技数～

1896年の第1回アテネ大会は男性のみの参加で、女性の参加は認められていませんでした。スポーツは男性がするものだと考えられていたからです。女性の初参加は第2回パリ大会で、その数は997人中わずか22人でした。また、日本の初参加は1912年ストックホルム大会ですが、女性は1928年アムステルダム大会の人見絹枝選手が最初の参加で、日本においても女性の参加は遅れていました。

女性の参加が実現したパリ大会でしたが、参加可能競技はテニスとゴルフのみ。その後も、IOC（国際オリンピック委員会）によって「女性らしい」とみなされた競技のみ女子種目として認められてきました。1976年モントリオール大会で初めて5割を超え、2012年ロンドン大会において、全競技で女性の参加が可能となりました。



～性別を疑われたアスリート～

「自分は女性だ」。あえてそう主張せざるをえない状況で戦い続けてきたアスリートがいます。陸上800mでオリンピック2連覇を達成した南アフリカのキャスター・セメンヤ選手です。彼女には長年ひとつの疑惑がかけられてきました。

「セメンヤは男性ではないのか」

疑いの理由は、男性ホルモンの値が生まれつき高い『性分化疾患』という症状を持っていること。平均的な女子選手よりも多いことが、不公平だと批判されているのです。彼女は、生まれつきの体質への批判に戸惑いを感じていました。



「私は声も低いしがっしりしている。でもそれは変えられない。生まれついた体に文句を言われても、じゃあ神様を責めるの？」

走ってはいけないのか？

初めて疑惑をかけられたのは2009年の世界選手権。当時18歳のセメンヤ選手は大差で優勝を果たします。しかしレース後、性別検査をされ、男性の疑いがあるとの報道が世界中に流されました。

そして彼女は、その後の大会への参加を禁止されました。この時、国際陸上競技連盟が求めたのが、薬を飲むなどの医療的な措置によって、男性ホルモンを一般的な女性の値まで下げること。



「私に権限はない。走ることしかできない。」

規定を受け入れ、苦しみながらも彼女は走り続けました。

そんな規定をなくそうと立ち上がったアスリートがいます。インドのデュティ・チャンド選手です。彼女も、『性分化疾患』であることを理由に、大会出場を禁じられていました。

「人はみな、身長も体の力も違います。それぞれが自然なのです。」



2014年、チャンド選手は世界で初めて、規定の廃止を求める裁判を起こします。1年にわたる審理の末、チャンド選手は勝訴。裁判所は規定の廃止を決定しました。

競技に復帰したチャンド選手は、2016年リオデジャネイロ大会出場を果たしました。チャンド選手の闘いによって、セメンヤ選手も救われます。薬を飲むことなく出場することができ、優勝したのです。レース後、セメンヤ選手はチャンド選手にこう語りかけました。



「あなたの闘いは世界のためになりました。自分のためだけではなく、私たちみんなのために闘ったのです。」

ありのままの体で走る権利を手にしたセメンヤ選手。しかし闘いは終わりませんでした。オリンピックで敗れたライバル選手たちからの強い批判があり、再び規定が作られたのです。

規定がなければ、性分化疾患の選手たちが表彰台と賞金を独占することになる。

セメンヤ選手は、規定は不当だと訴えました。

生まれ持った体のままで走ってはいけないのか？

彼女たちの問いに、あなたはどうか感じるでしょうか。